

巻頭言

技術は未来を変える

企画管理部長 岡本 正弘

「ところで、新しい技術は、日本の農業の未来を明るくすることができるのでしょうか？」

ある雑誌社のインタビューが終わりにさしかかったところで、記者からこんな質問を受けました。私は、すぐには返答できませんでした。「技術は未来を明るくする」といった言い回しはたびたび耳にしますが、自分自身で納得するほどに、この問題について考えたことがなかったからです。

作物の育種の分野ではよく、「10年後の社会を見据えて育種しろ」と言われます。交配してから新品種になるまで、一口に10年程度かかるからです。とは言うものの、10年後の未来を誰が予測できるのでしょうか。

技術開発における未来を見据える視点とは、未来という、かけ離れた世界を占うのではなく、今現在の社会のありようを真っさらな視点で捉えることができるか、はっきりはしていないけれど確実に起こりつつある些細な事象や今の社会に足りないものに気づくことができるか、ということのように思います。

良い例として、紫サツマイモがあります。九州沖縄農業研究センターが紫サツマイモの最初の改良品種「アヤマラサキ」を世に送り出したのは、1995年、今から17年前のことです。当時は、一体誰が紫サツマイモを使うのか、と周囲からはほとんど見向きもされなかったと聞きます。しかしながらその後、紫サツマイモの実用化に向けた関係者のひたむきな努力は、徐々に実を結び始めます。まずは熱や光に強い紫の天然色素の原料として、次に紫の色素アントシアニンの機能性研究の進展と相まって健康飲料等の原料として、さらには香り豊かな芋焼酎の原料と

して、次々と、新たな需要が開拓されて行きます。

水稻品種「にこまる」(2005年育成)は、多収・良質・良食味をこれまでになく高いレベルで実現した品種です。一方、

いもち病やトビイロウンカ等への抵抗性は改善されてはならず、育種そのものから言えば、当時の潮流であった病害虫抵抗性育種からはハナから外れた品種でした。しかし、「にこまる」の育成が終盤にさしかかった西暦2000年過ぎ頃になると、西日本を中心に高温による米の品質低下問題が顕在化します。こうした中、高温下でも品質が低下しにくい「にこまる」の特性が一躍、注目されるようになります。

未来を変えることは、確かに、とても難しいことのように思えます。しかし、現実には普及を拡大しつつある紫サツマイモや「にこまる」は、見方を変えれば、現在という、10年前の社会から見れば10年後の未来、を確実に変えてきたことに気づきます。紫サツマイモがなければ、天然色素や健康飲料等で拓いた40億円ともいわれる市場は生まれなかったでしょうし、「にこまる」をはじめとする高温登熟耐性品種がなければ、品質低下に悩む西日本の稲作農家の多くは、稲作の未来に明るい展望を見い出せずにいたでしょう。

そういった事実思いをはせる時、「確かに技術は未来を変えるのだ」と、私たち技術者は胸を張って答えられるような気がします。

